

第6室(書跡)

「一法隆寺伝来の法華経一」

N-12 法華経（ほけきょう）

黄麻紙に薄墨の界線をほどこした料紙に『法華経』8巻を、通例の一行17文字詰めに書写したもの。やや肉太で、力強い筆運びで書写され、全巻一筆である。奈良時代の整然として端正な写経に比べるとやや柔らかみを帯びており、書写の時期が平安時代にかかっている可能性もある。

第6室 染織—組紐幡頭と多彩な幡足—

染織は山形文組紐幡頭を中心としてさまざまな色に染められた幡足を展示する。組紐幡頭の組紐は御物の「聖徳太子二王子像」の太子が腰に着するものと同種の実物資料であり、服飾史上にも貴重な作品。また幡足の作例を通じ、古代の豊かな色彩の世界を概観したい。

N-28-1：黄地雲唐草獅子文綾幡頭（きじくもからくさししもんあやばんとう）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

仏事に使われた絹製の幡で、頭の部分にあたる幡頭。文様は、雲を唐草風につないだなかに、前足を踏み上げた勇ましい獅子を向かい合わせに配している。

N-50-2：山形文組紐幡頭（やまがたもんくみひもばんとう）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

細い帯紐を山形に組み合わせた幡頭部分。
組紐は、種々の色系を用いて二条軸一間組という技法で山形文を表わす。組紐は、帯に使われることが多く、御物の「聖徳太子及び二王子像」（図を参照）にも認められる。



聖徳太子及び二王子像（聖徳太子の帯部分）

N-311：赤地葡萄唐草文綾幡足残欠（あかじぶどうからくさもんあやばんそくざんけつ）

奈良時代・8世紀

幡の下に下がる幡足の残欠。鮮やかな赤地に葡萄唐草文を綾で織りだしている

N-319-74-2：黄地入子菱繫文綾幡足残欠（きじいりこびしつなぎもんあやばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

多重の菱を納めた繫文の綾。こうした幾何学文の綾は技法的に古式なものである。

N-319-39-1：青地平絹幡足残欠（あおじへいけんばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

藍染された幡足の残欠である。

*裏面につづく

N-319-39-2：紫地緞幡足残欠（むらさきじしじらばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

緞とはたて・よこの糸に強い撚りをかけて平織とした織物。法隆寺裂のなかでも比較的現存例が少なく、貴重な作品である。

N-319-39-3：緑地平絹幡足残欠（みどりじへいけんばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

古代には緑色を単独で染める染料はなく、キハダやカリヤスなどで黄色に染めた後、藍でもう一度染め緑色とした。

N-319-39-4：淡赤地平絹幡足残欠（うすあかじへいけんばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

強い原色に染めることが多い古代の染織品にはめずらしい柔らかな色彩の幡足である。

N-319-39-5：赤地平絹幡足残欠（あかじへいけんばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

ぼろぼろの姿となっても、ついこの間染めたかと思うほど、鮮やかな赤色が残されている。

N-319-39-6：緑地平絹幡足残欠（みどりじへいけんばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

よく当初の形態を残している幡足の残欠。左右の両端を三つ折縫いとしている。

N-319-42-1：紫地緞幡足残欠（むらさきじしじらばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

N-319-39-2 を参照。

N-319-71-2：黄地平絹幡足残欠（きじへいけんばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

茶色味のかかった黄色に染められた幡足。黄色い幡は「命過幡（みょうかばん）」と呼ばれ、死者の往生を願って四十九日の間寺院に掲げられたものと考えられる。